

黄連解毒湯 (外台秘要方)

組成 黄連1.5~2 黄柏1.5~3 黄芩3.0 山梔子2~3

主治 热毒壅盛三焦 心火上炎 (症候は下記参照)

効能 滌火解毒

プロフィール

本方は、一般に『外台秘要方』(巻一傷寒上)に『崔氏方』から引用した処方として知られているが、葛洪の『肘後方』にも方名無しの同方が記載されている。単独で多用されるが、そのほかに四物湯と合して温清飲として用いられたり、荊芥連翹湯などの一貫堂の処方に組み込まれることも多い。なお、『万病回春』には、上記の4味に柴胡、連翹、芍藥を加えた同名の処方があり、「回春の黄連解毒湯」として区別されている。

方解

本方は、三黄瀉心湯より大黄を去り、黄柏と梔子を加えたものである。黄連は主薬で心熱と中焦の火を瀉す。黄芩は肺熱と上焦の火を瀉す。黄柏は下焦の火を瀉す。全体で、上焦・中焦・下焦(上中下分類の三焦)の火熱を清すると同時に、気と水と火の通路である(開放循環系としての)三焦の火熱や湿熱を清する。また、清熱瀉火作用と同時に、清熱解毒作用も發揮し、單なる火や熱のみではなく、熱毒といわれる病態をも改善する。

四診上の特徴

原典の記載は、熱性の感染症に用いたものであり、特徴がよく描かれているが、ここでは一般的な四診上の特徴をあげておく。

望診上、顔面や眼瞼結膜の発赤・充血など、上半身や顔面の熱症状を見ることが多い。皮膚症状の場合は、患部に発赤が顕著に見られる。

問診上、心火上炎のために不眠・不安・イライラがあり、胃熱のためにむねやけ・心下痞を訴えることがある。

理論的には舌診上、舌質紅、舌苔黃が見られ、脈診で

は有力(実)で数(熱)を呈する。矢数は、「舌は乾燥し、時に黒苔を生じており、脈は一般に大きく有力であるが、沈でも充分力がある」と述べている¹⁾。腹診では、腹力があり心下痞鞭を認めることが多い。また、寺澤は下腹部のいたるところの圧痛点が特徴的であると述べている²⁾。

使用上の注意

矢数は、本方を虚証の患者(30歳、産後の自律神経症状)に与えて、思わぬ副作用をみた症例を報告している¹⁾。

臨床応用

本方は、『外台秘要方』や『肘後百一方』では、傷寒の経過中に熱証が顕著となり、そのため精神症状をきたしたものに用いることになっている。しかし、現在では急性疾患に用いられるることは少ない。三焦実熱、心火上炎を目標に諸種の疾患に用いる。

■ 湿疹・皮膚炎・アトピー性皮膚炎・日光皮膚炎・尋麻疹など

発赤の強い発疹に対する第一選択剤である。通常、皮膚は発赤し、熱感があり、やや乾燥気味であることが多い。橋口は実熱証の皮膚疾患に黄連解毒湯を用いて極めて有用、有用合わせて65%と報告している³⁾。単独で使用するほか、他の処方に加えて用いることが多い。また、大河原らは、老人性皮膚瘙痒症に対し、抗ヒスタミン剤と黄連解毒湯の比較で同等の効果が認められたと報告している⁴⁾。皮膚の化膿症(掌蹠膿疱症など)や膠原病にも用いられる⁵⁾。

■ 高血圧症

高血圧症に随伴して見られるのはせ感や顔面紅潮、イライラ、焦燥感、易怒性興奮、動悸などの症状を心火上炎の結果と考え、本方を応用する試みが行われている。

しかし、必ずしも顔面紅潮があるとは限らない。ただし、成味らによれば、随伴症状が消失しても降圧効果がなかったり、降圧効果が見られても症状が残る場合も見られるという⁶⁾。

また、黄連解毒湯単独で血圧が不安定になり、温清飲にしたところ安定した症例の報告もある⁷⁾。

■ 脳血管障害および脳血管性痴呆

高齢者の脳梗塞後遺症、脳出血後遺症などで、精神症状を改善する目的で用いられる。山本は、脳血管性痴呆25例に黄連解毒湯を投与した結果、全般改善率は対照群と比較して有意な差はなかったが、知的機能、感情機能、その他(多弁、錯乱、落ち着きのなさなど)に改善が著明であったと報告している⁸⁾。

木元は、急性期脳梗塞に、西洋医学的治療に五苓散と黄連解毒湯を併用して良好な成績を見た例を報告している⁹⁾。また、ガイスペック症候群(高血圧と多血症)のような脳血管障害予備群の治療にも有効である¹⁰⁾。

■ 胃炎

本方は黄連・黄芩を含み、瀉心湯の意を有し、主として胃熱による上腹部の症状に用いられる。『中医処方解説』には、「胃粘膜が充血して、びらん・出血・カタールをともなう場合に応用し、暴飲・暴食・高濃度のアルコールによっておきた急性・慢性の表層性胃炎に用いる」とある¹¹⁾。また、ヘリコバクターピロリの発育を抑制するという報告があり¹²⁾、本方を胃炎症状に使用する際の裏付けの一つとなっている。

■ 精神疾患、不眠

心火上炎による精神・神経症状に用いられる。ストレスが原因のめまいや、舌痛症(後述)やしづれなど心因反応的な症状に使用されることもある。また、統合失調症における精神安定作用も報告されており、症状の安定のみならず治療薬の使用量の減量をも期待できる¹³⁾。ただし、重症のものに関しては漢方のみでの加療は困難であ

る。不眠に対しては、「頭がさえ、つまらないことが気にかかり、イライラして落ちつかず、のぼせる」のが目標で、高血圧や更年期障害のときに多い²⁾。

■ 出血および出血傾向

血熱による上部(特に顔面)の出血に応用される。のぼせによる鼻出血にしばしば用いられるが、必ずしも上部に限らず、血熱による迫血妄行の病態であれば止血剤として広く用いてよい。最近では潰瘍性大腸炎の下血に使用した報告¹⁴⁾もある。

■ 口腔疾患(口内炎、舌痛症、味覚障害、歯周炎¹⁵⁾など)

口内炎や舌痛症、味覚障害に使用されることがある。胃熱の上炎によると考えられるが、舌痛症は時に心身症として考えられることがあり、この観点から言えば、心火上炎による可能性もある。

■ 感染症

全身感染症で熱状を呈するもの、即ち、発熱・顔面紅潮・濃縮尿・舌質紅、舌苔黄、脈数のものに用いる。頭痛、意識障害、不眠、イライラなどの症状を伴うこともある。肺炎、急性腸炎、膀胱炎、肝炎(急性期あるいは急性増悪期)や川崎病¹⁶⁾にも応用される。

■ その他

透析患者にみられる様々な症状[ストレスレッグ(下肢のイライラ感)や皮膚瘙痒症等]にもしばしば使用されている¹⁷⁾。

更年期障害などのホットフラッシュに限らず、ほてりやのぼせなどにしばしば用いられる。中村らは「お茶をよく飲み、甘いものをよく食べる患者、汗をかかない患者、あるいは筋痙攣を伴う患者のほてり」に有効性が高いと報告している¹⁸⁾。

二日酔い防止にも用いる。花輪は「つきあいで嫌々飲まなければならない時、あらかじめ本処方を服用しておくと悪酔いが少ない」と述べている¹⁹⁾が、勿論飲酒量による。

<参考文献>

- 矢数道明：臨床応用漢方処方解説 創元社 50-54, 1966.
- 寺澤捷年：黄連解毒湯 漢方医学講座 43 13-20, 1987.
- 橋口裕治：実熱証の湿疹・皮膚炎に対する黄連解毒湯エキスの有用性 日本東洋医学雑誌 50 471-478, 1999.
- 大河原章ほか：老人性皮膚瘙痒症に対するTJ-15、TJ-107の使用経験 西日本皮膚 53 1234-1241, 1991.
- 榎宣修一：皮膚科における黄連解毒湯の応用 漢方と最新治療 10 239-242, 2001.
- 成味 純ほか：高血圧に対する漢方湯液(エキス剤)単独療法の長時間血圧計による評価 和漢医薬学雑誌 11 282-283, 1994.
- 高橋貞則：黄連解毒湯で高度な血圧の不安定現象をおこし、温清飲の投与で血圧の安定を見た脳動脈硬化症の一例 漢方の臨床 37 728-733, 1990.
- 山本孝之：脳血管性痴呆の漢方療法 和漢医薬学雑誌 11 452-453, 1994.
- 木元博史：急性期脳梗塞に対する漢方薬併用14例の検討 Japan Standard Stroke Registry Study (JSSRS)との比較を中心として 和漢医薬学雑誌 20 68-73, 2003.
- 丸山征郎：黄連解毒湯を脳血管障害の治療にいかす 漢方と最新治療 10 247-249, 2001.
- 神戸中医学研究会：中医処方解説 黄連解毒湯(応用の実際) 258-259 医薬出版社 1982.
- A.M.A.KABIRほか：黄連解毒湯によるHericobacter pylori感染症発症阻害の機序 和漢医薬学雑誌 15 70-77, 1998.
- 山田和男ほか：精神分裂病および他の精神病性障害患者の急性期における睡眠障害に対する黄連解毒湯の臨床効果 日本東洋医学雑誌 47 827-831, 1997.
- 新井 信ほか：大腸疾患の3症例 漢方の臨床 43 377-382, 1996.
- 神谷 浩：炎症型歯周炎の急性発作期に対する黄連解毒湯と排膿散及湯の効果 日本東洋医学雑誌 44 191-195, 1993.
- 広田聰子ほか：二重盲検法による川崎病に対する黄連解毒湯エキスの効果 小児科臨牀 38 2329-2335, 1985.
- 湯浅保子ほか：透析患者の上腹部不快感および口腔乾燥症状に対する黄連解毒湯の使用経験 新薬と臨牀 45 2283-2290, 1996.
- 中村 了ほか(名古屋百合会)：ほてりに対する黄連解毒湯の効果についての疫学的研究 Φυτο 4(1)6-14, 2002.
- 花輪壽彦：漢方診療のレッスン 金原出版 18, 1995.